

6/18 (土) まいど！ 倫理号です。病に学ぶなんて伊々出来な... ですか
聞き直るといいのかも？

幸せ運心アホ一鳥

2022. 6. 18～6. 24

今週の

倫理

6月のテーマ | 万象肯定

1286号

倫理法人会のテキスト『万人幸福の栞』の著者・丸山敏雄は、四十代の頃、自身の体験を通じ、ある発見をしました。

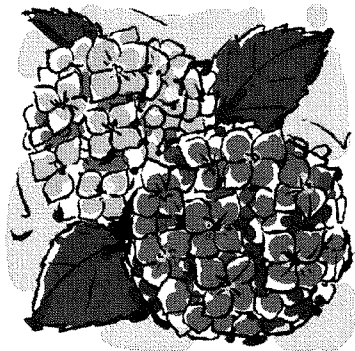
学生時代は心身ともに壮健だった丸山敏雄が、師範学校の教員時代に生命について考え、保健衛生について学び、食物に対して過度の注意を払ったことにより胃を弱くしました。健康について知識を深めたことで体調を崩してしまつたのです。

例えば、生ものは火を通してから口にす
る、水は沸騰させてから飲む等、いわゆる「衛生家」になりました。長男に対しても「あれを食べるといかん、これを食べるといかん」と押しつけました。結果、長男はやせて、病弱になつていきます。

しかし、ある時、恩師の教えから、与えられた食物を喜んで食べる、過度の心配をすることなく有難く頂くことの大切さに気がきます。それらを実践することで、自身も長男も健康体へと変わっていきました。ここから「食の倫理」や、『栞』第七条などに結実していったのです。

病気は実は、困つたもの、人生の苦しみなどではなくて、有難い自然の注意、天の与えた赤信号であるから、喜んでうけて、間違いを直すべきである。(『栞』五十七頁)

病気という苦難は、赤信号という情報といえます。その情報を喜んで受け止め、実践を通じて、原因となる心の不自然な部分を取り除いたとき、人は成長していきます。しかし、人の体はある年齢を過ぎると衰えていくのも事実です。この段階では病気の



体と向き合い、病に学ぶ

原因を探るより、病気そのものを受け入れることが肝要でしょう。

前述の体験で健康体となった長男として登場した、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋は、その後は大きな病とは無縁となり、永きにわたり理事長職を務めていきます。

しかし、六十代半ばに脳内出血で倒れました。十八歳から短歌に親しみ、丁度この頃、俵万智さんの歌と出合ったのを機に口語歌を作り始め、後遺症である右半身のしびれや麻痺、またその他の病気をも歌にしたのでした。

足はまだ歩いてゆける！階段のひとつひとつを踏みしめながら

歩行が困難になり、家族が通勤用の車を用意すると、「歩いて通えなくなつたらもうオシマイだ」と断り、自身の足で通勤を継続しました。病気を天啓と受け止め、病気からくる痛みを見据え、エッセイ「痛いから、いい」では、痛みがあるから前進があり、人間は幸福で、生きていて良かったと思えるのだということを記しています。

加えて、病を機に、かつて大脳生理学を研究していたことから、脳の構造や機能についての研究や、「生と死」の研究についても学びを深めていきました。そして、晩年には次の歌を詠みました。

雨の日は雨をききつつ風の日は風を聞きつつよるこんで生きる

丸山竹秋は、あらゆる事象を、拒むことなく、ありのままに受け止め、喜んで歩み続けた人であったのです。